

水上勉文学における「満洲娼婦」像の生成 —「からゆきさん」から朝鮮人「娼婦」へ—

The Creation of the Image of "Prostitutes in Manchuria" in the Literature of Tsutomu Mizukami's Works: From "Karayuki-san" to Korean "prostitutes"

楊 柳岸

This paper will focus on the image of "Prostitutes in Manchuria" that emerged in Tsutomu Mizukami's Manchuria related works from the 1970s to the 1980s. With the spread of the Empire of Japan's colonial rule, this group of women who lived in a low-class society, had to move from Japan to Manchuria, where they also had no choice but to make a living with their own bodies. Although the realistic image of "Prostitutes in Manchuria" is difficult to be recorded in official records, the Manchuria related works of Mizukami's literature are a series of novels that can restore the reality of these women.

The Licensed Prostitution, a systematic exploitation that surrounds prostitutes, depicted in Mizukami's literature of the 1960s, as well as the structurally sexual exploitation of women as physical tools, was reinforced during the war. Whether it was a Japanese prostitute who had been going to Manchuria and transformed herself into "Karayuki-san", or a Korean prostitute who was the predecessor of "comfort woman", the essence carries sexual comfort of the war.

Then, from Mizukami's works since the 1970s, this image caught between the *double fetters of class and sex*. Particular in *The Moon of Shenyang*, the image of the Korean prostitute bound by the triple fetters of class/sex/ethnicity is brought to light. Therefore, it can be said that *The Moon of Shenyang* is the work that sums up Mizukami's "realistic experience of Manchuria". The "Prostitutes in Manchuria" fictionalized by Mizukami's own creative consciousness, is the crystallization of his questioning of the essence of Manchuria.

However, we should not only evaluate this novel in a positive way. In *The Moon of Shenyang*, the prostitute was lyrically formed as the narrators' mother. While the narrators sympathize with prostitutes, they're also the males who buy their bodies, and the prostitute never escapes the gaze of the male dominant. It's because there is a major problem: the narrators of the female prostitute are absent. In other words, the male narrators of Mizukami's Manchuria related works don't recognize the prostitute in Manchuria as an entity with her own personality, but instead use her in a way that suits the convenience of men.

【キーワード】「満洲」、「遊廓」、「娼婦」像、からゆきさん、植民地主義

Manchuria, Red-light District, Image of Prostitutes, Karayuki-san, Colonialism

はじめに

『フライパンの歌』(1948)以後、長く沈黙していた水上勉(1919-2004)は、日本共産党内部の非合法的な地下組織「トラック部隊」を題材とした『霧と影』(1959)、当時まだ「奇病」と見なされていた水俣病を題材にした『海の牙』¹(1960)によって、松本清張と並ぶ社会派推理小説作家として再出発した。その

1 『海の牙』は推理小説の形をとり、九州水俣に発生していた公害病の被害者の置かれた立場を訴えてみた作品であり、「第14回日本推理作家協会賞 長篇賞」を受賞した。

後、自伝的かつ純文学的な傾向を打ち出すようになった水上は、『雁の寺』(1961)で第45回直木賞を受け、人気作家としての地位を確立する。

1948年から2004年までの長期間にわたって作家活動を続け、多様な作品を発表し、多くの読者を獲得した水上勉の文学を形成する骨格を一言で言い表すならば、社会の下層を生きる人々への深い共感ではないか。なかでも水上は、運命に翻弄され、社会の底辺で生きる「女性」たちへの「視線」を作品に絶えず織り込んでいる。

水上勉文学における下層社会を生きる「女性」への眼差しは、水上が幼くして禅寺へ預けられた孤独感に起因する「母親願望」や「母恋い」の反映として作家論的に解釈されてきた。そのことは木村光一²をはじめとする論者によって従来しばしば指摘されてきた。しかし、このように水上勉文学における下層社会を生きる「女性」を「母」の代理的存在と解釈することには限界がある。なぜなら、1970年代を境として、水上は「満洲」を舞台にした作品を次々と発表し、一連の「満洲」関連作品においては、例外なく「満洲」の「娼婦」(以下は「満洲娼婦」)を描いた。こうした「満洲娼婦」は、水上の故郷への慕情とつながる原体験的な「母」の表象から遠い「異郷」の「女性」たちだからである。では、「母恋い」の反映としてではない「娼婦」像ないし「満洲娼婦」像を、水上勉文学のなかで改めてどのように位置づけるべきだろうか。むしろ「満洲娼婦」は水上の戦争期の「満洲実体験」に基づいて造形されたものであり、十数年にわたって発表され続けた「満洲娼婦」語りには、水上自身の「母恋い」あるいは戦争体験の告白という作家論的意義に留まらず、「娼婦」ないし「女性」をめぐる社会構造に関わる問題意識が潜んでいるのではないか。

本稿の第一の目的は「大連逢阪町」(1979)から始まり長編『瀋陽の月』(1986)でピークに達する水上勉文学の「満洲」関連作品に注目し、いかに水上が公的記録や歴史に残ることが難しい「満洲娼婦」の実像を小説の中に盛り込んでいるか確認することである。「満洲」関連作品として唯一の長編小説である『瀋陽の月』に着目し、前作「瀋陽の半月」³という短編小説が加筆によって『瀋陽の月』に変貌した経緯を手掛かりに「満洲娼婦」像を分析する。そして、「満洲娼婦」像を集積し、その変遷を辿ることによって、水上の「娼婦」ないし「女性」をめぐる社会問題の射程を改めて考察することが第二の目的である。

そこで、まずは本稿の第1節で1960年代の水上勉文学に描かれた「娼婦」像を整理し、「母恋い」の反映ではない下層社会を生きる「女性」たちを取り巻く社会構造やコンテクストを分析する。そして、第2節では1960年代の水上勉文学に見られる「女性」あるいは「娼婦」たちの表象が、1970-80年代の「満洲」関連作品ではどのように持続あるいは変化しているのかを辿るために「満洲娼婦」像を整理する。

1. 1960年代の「娼婦」像——男性を「救済」する役割

直木受賞作『雁の寺』並びに『五番町夕霧楼』『越前竹人形』を代表とする初期作品群は、水上が自らの「遊廓」経験に基づき、京都、越前(福井)を舞台にしたものである。その中に登場する「女性」の多くは「賤業婦人」「醜業婦」とも呼ばれる「娼婦」である。従来の研究では「娼婦」たちは、男性の視線から繰り返し美化されて描かれており、「母親憧憬」や「救済」などのキーワードと結び付けられてきた。たとえ

2 「人はそういう主人公たちの容貌や、体形、そして絶えず上眼づかいに他人を見る、おどおどしたひっこんだ眼に、軽い優越感を覚えたあと、まるでその代償でもあるかのように、彼らに清らかで美しい心を与えようとする。里子に対する慈念の、母親に対するような思慕。夕子に対する正順の、実の妹に対するようなやさしさ。そして、喜助の玉枝に対する母親憧憬。それぞれのなかに純粋な動機を、いや、純粋さしか見つけずに、水上勉さんのこれらの作品を、叙情的という言葉でくくり、その主人公たちの秘めた心に甘美なものを覚えたりする人が多い」木村光一「母親願望とその異形な愛」水上勉全集月報2、1976年、6頁。

3 水上勉「瀋陽の半月」『新潮』1986年新年号。

ば、『雁の寺』において、慈念は桐原里子⁴に対して、「母親思慕」が混在する感情を抱いている。他には、『五番町夕霧楼』において、片桐夕子は心から吃音で孤独な櫛田正順を相手にしている。『越前竹人形』において、喜助は玉枝を母のように愛している。いずれも「娼婦」が劣等感を抱く男性を「救済」する役割を担っていると読まれてきた。男性を慰謝し、情緒を引き立てるキャラクターとしての「女性」あるいは「娼婦」でしかない。そのことは、谷川健一が「水上勉は作中人物たちの行為をつうじて訴えねばならぬ主張を、登場人物の背景や過去や環境など輪郭の描写の努力に解消してしまっている」⁵と批判したように、1960年代の水上勉文学において造形された「娼婦」たちは、十分な社会的リアリティーをもった存在として浮かんでこないという問題点があることが否めない。1960年代の水上勉文学に語られた「娼婦」を社会学的コンテクストから解釈した岩淵宏子は、『五番町夕霧楼』のヒロインである夕子というキャラクターの造形は「伝統的な遊女の水脈ののって描き出された女性」⁶であると指摘した。また、谷川健一⁷が『越前竹人形』を草双紙風な作品と捉え、近世的な「娼婦」像を玉枝に見出しているように、1960年代の水上勉文学に語られた「娼婦」は近世風を受け継ぎ、伝統的、哀しいというイメージが強く、戦後の下層社会を生きる「女性」たちのリアリティーが十分に反映されているとは言い難い。

前掲の三作に描かれた「娼婦」たちはいずれも貧しい出自で、家族、恋人のために体の自由を失い、更には命までも犠牲するというフィクションにおける悲劇性を引き立てるためのキャラクターとしてしか機能していない印象がある。たとえば、『五番町夕霧楼』は、1950年に起こった実際の事件である「金閣寺放火事件」を下敷きにしたものであるが、水上がその物語の中心に据えたのは1958年の「売春防止法」施行まで存在していた京都・五番町の「遊廓」を舞台に、母の医療費をつくるために、「妓楼」に売られてきた夕子と鳳閣寺の学生僧である正順との悲劇関係である。また、『越前竹人形』では、竹細工職人である喜助は父が亡くなった後、芦原温泉の「遊廓」の「娼婦」玉枝を嫁として家に迎えた。しかし、喜助は玉枝を母親のように崇め、夫婦関係を拒絶したあげく、間接的に玉枝の死を導いた。

天野知幸は作品と戦後の廃娼運動との繋がりを提起し、五番町と樽泊の空間的な関係性、性産業をめぐる時代背景に注目し、『五番町夕霧楼』を歴史的なコンテクストから紐解いた⁸。天野によると、水上が『五番町夕霧楼』の物語時間を「金閣寺放火事件」が起こった1950年から1年後にずらしたのは、「売春防止法案」可決を目前に控えた時期に意識的に設定しようとしたからである。このように見てくると、『五番町夕霧楼』は、「廃娼運動」という現実的なコンテクストを多分に持っていると言え替えることができる。

また、「廃娼運動」という現実的なコンテクストは夕子と同じ「妓楼」の「娼婦」敬子の行動からも透けて見える。「敬子は本棚から、新しく配達されてきた令女苑をとり出し、ぺらぺらと目次を繰って、巻頭の女性評論家が発表している、廃娼問題と現代風俗なる一文に興味をもって、読み入れっていた」⁹という行動から『五番町夕霧楼』における「廃娼運動」という歴史的・社会学的なコンテクストはうかがえる。旧制の女学校出身で、短歌を雑誌『令女苑』に投稿する敬子は「娼婦」という身分であるにも関わら

4 『雁の寺』のヒロイン桐原里子はもともと画家の「妾」で、後には住職・慈海に囲われる「匿女」となった作中で里子の過去詳しく記述されていないが、里子と慈念との対話などから「酌婦」（即ち「私娼」）であったと推測できる。

5 谷川健一「水上勉著『越前竹人形』草双紙風な読物 環境の上に温まる人物たち」『日本読書新聞』1227号、1963年10月7日。

6 岩淵宏子「『五番町夕霧楼』」『国文学：解釈と鑑賞』61(2)、至文堂、1996年、88頁。

7 谷川健一「水上勉著『越前竹人形』草双紙風な読物 環境の上に温まる人物たち」『日本読書新聞』1227号、1963年10月7日）を参照。

8 天野知幸「戦後の京都と「赤線」の町：水上勉「五番町夕霧楼」論」（京都における日本近代文学の生成と展開）『佛教大学総合研究所紀要』2008(1)、2008年、161-176頁。

9 水上勉『五番町夕霧楼』角川文庫、1996年、146頁。

ず、新時代の女性としての性格を同時に持っている興味深い人物である。夕子や敬子が体現するのは、たとえ彼女たちの生きる「遊廓」という場が「娼婦運動」の大きなうねりに巻き込まれたとしても、自らの性を売り、貧しい実家へと送金せざるえない運命を逃れられない下層社会を生きる女性たちの姿である。

ここまでの論をまとめると、1960年代に水上勉文学においては『五番町夕霧楼』の「娼婦」像だけは、「売春防止法」の実施前の「娼婦」たちの実情が反映されているといえる。では、他の二つの作品における「娼婦」像を社会的なコンテキストから再検討することは可能であろうか。

本節で注目している『雁の寺』(1961)、『五番町夕霧楼』(1962)、『越前竹人形』(1963)は、いずれも戦後に執筆された作品であるが、それぞれ『雁の寺』は1933年の秋から11月、『五番町夕霧楼』は1951年の初秋、『越前竹人形』は1922年の秋末から1925年を物語の舞台にしており、意図的に戦争時期をずらすという時代設定は興味深い。特に『越前竹人形』の物語の時間が大正時代に設定されていることに注意しなければならない。なぜなら、大正時代という設定は、当時厳しく禁じられていた墮胎に関わる墮胎罪体制¹⁰に繋がっているからである。水上は、墮胎を玉枝の悲劇を招く原因としている。墮胎罪について、「大正十三年当時は、現今のように墮胎ということが大ぴらに出来なかった。胎児を墮す場合は症状を役所に届けねばならない。産婆に依頼して胎児を闇に葬るようなことがあれば、産婆自体も営業停止を喰う、きびしい取締法規が出来ていて、妊婦もまた刑罰をうけた。人命をそれほど尊重したせいであろうか」¹¹と作中で詳しく解説されている。このように大正時代という時代や墮胎罪というコンテキストの面から『越前竹人形』は従来あまり着目されてこなかった。

重要なのは、墮胎罪が人命を尊重するためではなく、むしろ女性の権益の無視と生殖の権利の搾取を前提に制定された点である。それは、藤目ゆきが「性と生殖の不自由で、公娼制度—墮胎罪体制と同様に、それは階級、民族、性の支配の結果を被支配大衆の側に負わせる、性—生殖に対する反人民的統制の体制でもあったのである」¹²と指摘したように、墮胎罪とは特に女性の「性」への支配を強化するものでしかない。『越前竹人形』では、墮胎罪というコンテキストの面から女性とりわけ「娼婦」たちを取り巻く制度的な抑圧状態が下地になっているといえるのだ。

したがって、水上勉文学における1960年代の「娼婦」像はフィクションにおける悲劇性を引き立てるためのキャラクターとしてしか機能していない印象がある。以上のように、歴史的・社会的コンテキストに注目すると、近代公娼制度下の「娼婦」たちの断片が浮かび上がってくるのである。しかし、1960年代の水上勉文学は戦時下の「娼婦」たちを描いていないという大きな空白が残されたままである。手放しで水上の創作態度をリアリティーが含まれているからといって称えることはできないだろう。墮胎罪に疑問を覚えた水上であっても、娼婦の生存権を奪い、制度的な搾取を行う「公娼制度」を、そもそも正面から批判していないことにも留意が必要である。この時期の作品群における「娼婦」は、男性の視角で上からの目線によって語られており、例外なく、女性たちの身体も精神も男性の付属品でしかない。つまり、水上は、「娼婦」に表面的に共感するに止まり、その裏の社会制度などの真実を暴くことを回避している。言い換えれば、水上による1960年代の「娼婦」像は、現実の厳しい生存状況から分離され、美化され、造形されたフィクションなのである。では、1960年代で見られた「娼婦」たちの表象が、

10 明治政権は、政権樹立の始発から、墮胎を厳禁し、生まれた子どもはあまさず戸主（家長）のもとに戸籍に登録し把握、家長による届出——官許によって成立する婚姻以外の性交に対しては、一方に姦通と婚外児（私生児）の出生に対する法的差別化を行ない、他方には公娼制度を整備して国家管理売春の体系をつくり出した。（藤目ゆき『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、1998年）

11 水上勉『雁の寺・越前竹人形』新潮文庫、2005年、223頁。

12 藤目ゆき『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版、1998年、420頁。

1970-80年代の水上勉文学ではどのように持続あるいは展開しているのだろうか。

2. 1970-80年代の「満洲娼婦」像——戦時下の構造的搾取

1960年代の水上勉は、青少年時代に小僧生活を送った禅寺体験や「遊廓」体験に基づいて語り続ける一方で、還俗した後「満洲」で経験した戦争体験については終始暗黙したままだった。水上は戦争を語ることを意図的に回避していたといえる。

しかし、1970年以降、水上は小説の技法を練り、新たなジャンルや題材を試み始め、流行作家の枠を突破しようと図っている。その過程で幾つもの「満洲」関連作品が発表された。「満洲」とは、日本が現在の中国東北部で戦争を起こして建てた、傀儡政権「満洲国」(1932-1945)の略称である。水上と「満洲」との接点は、日中戦争が始まった翌年の1938年に遡る。19歳の水上は神戸から移民船「はるびん丸」に乗って「満洲」に渡り、奉天(瀋陽)の国際運輸会社で「苦力監督見習」という職に就いた。しかし、同年11月咯血で入院した。翌年2月に日本へ戻り、故郷の若狭で病気療養していた間、文学作品を耽読したことで小説家への道を踏み出すに至った。つまり、生涯最初の「異国体験」である「満洲体験」は僅か半年間にすぎなかったが、水上の作家生涯の起点となった出来事だと言える。そうした重要な体験であったにもかかわらず、「満洲体験」は、水上が『フライパンの歌』(1948)で文壇にデビューしてから長い時間が経過しても、作家自身によってあまり語られていないままであったため、「水上勉の空白の時代」と呼ばれている¹³。

改めて水上勉文学全体を総覧すると、1970年代を境に水上が「満洲」を語り始め、自らの「満洲」体験を基底にした「満洲」関連作品を次々と創作したことが分かる。こうした作風の転換をもたらしたのは1972年に日本と中国との国交関係が緩和された外交上の出来事と関わっていることを見逃してはいけな。つまり1970年代以降に展開する「満洲」関連作品は、日中文化交流が回復された胎動期の世間の風潮と水上の中国再訪の体験を踏まえているのだ¹⁴。

下記の【表1】は拙稿に改変を加え、水上の「満洲」を素材にした作品を羅列したものである。

【表1】水上勉文学における「満洲」関連作品一覧表(筆者作成)

作品名	発表年	語られたマイノリティー・グループ	「満洲」空間	ジャンル
「大連逢阪町」	1979年	「満洲娼婦」	大連	短編小説
「小孩」	1979年	「中国人苦力」	瀋陽	短編小説
「大連港駅」	1980年	「満洲」移民団	大連	短編小説
「黄色い写真」	1981年3月	「中国人苦力」	瀋陽	短編小説
「瀋陽の空」	1981年3月	「中国人苦力」「満洲娼婦」	瀋陽	短編小説
「奉天北市場」	1985年5月	「中国人苦力」	瀋陽	随筆
「瀋陽の半月」	1986年1月	「中国人苦力」「満洲娼婦」「中国残留孤児」	大連、瀋陽	中編小説
『瀋陽の月』	1986年11月	「中国人苦力」「満洲娼婦」「中国残留孤児」	大連、瀋陽	長編小説
「瀋陽にて(一)」	1987年4月	「中国人苦力」	瀋陽	エッセイ
「瀋陽にて(二)」	1987年4月	「満洲娼婦」	瀋陽	エッセイ
「大連にて」	1987年4月	「満洲娼婦」「中国残留孤児」	大連	エッセイ

【表1】に示されているように、水上が「満洲」について十数年にわたって書き続けた「満洲」関連作品

13 岩波剛『瀋陽の月』解説、新潮社、1986年、174頁。

14 これに関しては既に拙稿「水上勉『虎丘雲巖寺』における「中国」—1970年代の日本人作家の「中国訪問」を入り口に—」(『Quadrate: クアドラント: 四分儀: 地域・文化・位置のための総合雑誌』(23)、2021年、167-185頁)で論じた。

の系譜において、語りつづけたマイノリティー群体において顕著なのは「中国人苦力」「中国残留孤児」「満洲娼婦」である。次に示す【表2】は、水上の作品から「満洲娼婦」への言及が見られる主要な作品を整理したものである。

【表2】水上勉の「満洲」関連作品における「満洲娼婦」一覧表(筆者作成)

作品名	発表年	「満洲」の「遊廓」「私娼窟」	登場する「満洲娼婦」
「北市場の女」 (「満洲娼婦」を少し言及したが、「満洲」を意図的に回避する傾向があり、本格的な「満洲」関連作品と言えない)	1963年	奉天(瀋陽)・北市場の妓楼「埼玉軒」	「娼婦」・楠まつ枝(24歳) 和歌山に生まれ 17歳まで大阪にいた 20歳で「満洲」へ
「大連蓬坂町」 (水上勉の「満洲」関連作品の最初作)	1979年	大連・蓬坂町・金水楼	「娼婦」・ヒナ子 (本名:宮本さき) 九州の飯塚という炭坑町出身
瀋陽の空	1981年3月	奉天(瀋陽)・柳町にある「私娼窟」	「私娼」・中井ハルエ 北九州の飯塚出身 父母もおらず 血縁の者もない
☆「瀋陽の半月」 (実験作)	1986年1月	大連・蓬坂町 ¹⁵ 瀋陽・柳町	朝鮮人「娼婦」(名前知らず) 日本人「娼婦」・うた子(九州出身) 日本人「娼婦」・浦野はつ枝(九州出身)
★『瀋陽の月』 (「満洲」関連作品の成熟作)	1986年11月	大連・蓬坂町 日本人経営の「筑前家」 瀋陽・柳町(北市場の近く)の「きりん」	朝鮮人「娼婦」(平壤出身、21歳だという。李だとか、羅とかいった朝鮮人の女性名) 日本人「娼婦」・うた子(九州出身) 日本人「娼婦」浦野はつ枝(「生まれは九州福岡県で遠賀川と彦山川の合流する直方近くの二本松だといっていた。付近にいくつも小さな炭鉱があって、父親は鉱夫だったが、はつ枝が十一歳の時に離婚、母はべつの炭鉱飯場でべつの男に嫁し、父は行方不明になった」 ¹⁶)

【表2】で整理したように、水上勉文学における「満洲娼婦」の初登場は、1963年の「北市場の女」という短編に遡る。この作品は、「ここは奉天でも、外城にちかいごみごみした日本人町だったが、安っぽいトタン屋根の二階家のならんだ遊廓がならんでいた。そこで娼婦をしていたまつ枝という女とのいき

15 歴史上実在した地名は「蓬坂町」であったが、「瀋陽の半月」「瀋陽の月」両作では「蓬坂町」となっている。

16 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、144-145頁。

さつを書こう」¹⁷という書き出しから始まる。しかし、この「娼婦」の描写は曖昧な輪郭と性格しか持っていない。1979年の「大連逢坂町」に至ってようやく、「妓は二十七だといったが、細面の気弱そうな顔だちで、首がながかった」¹⁸というように、正面から「満洲娼婦」が語られ始めた。1986年の『瀋陽の月』は、水上が1985年にかけて「満洲」であった中国東北部を再訪した実体験に基づき、「大連逢坂町」を底本に、「瀋陽の半月」に加筆修正を経て書き上げたものである。つまり『瀋陽の月』は、長い年月にわたり水上が「満洲語り」を積み重ねてきた結果結実した円熟作だと位置づけられる。言うまでもなく、上記の【表2】で示した70年代から80年代の「満洲娼婦」像は、前節で整理した60年代の「娼婦」像の特徴を一部踏襲しつつも、新たな変貌を見せている。

したがって、次節以降、主に「瀋陽の半月」から『瀋陽の月』への加筆を中心に、水上勉文学における「満洲娼婦」像という表象の変遷を明らかにする。それを踏まえて、植民地主義的な観点から、「満洲」関連作品の成熟作である『瀋陽の月』に登場する「娼婦」たちの複層的な意味を捉えたい。

2.1 「満洲遊廓」——「日本帝国」から移植された「空間」

「瀋陽の半月」においても、『瀋陽の月』においても、「ぼく」は「満洲」に到着した夜、大連の「遊廓」で登楼する。日本による「満洲」への公娼制度移植は、日露戦争期の日本軍による「買売春」管理を出発点としていた。その産物は「満洲」の各都市にある「遊廓」である。橋谷弘によると、日本の植民地都市を特徴づけたのが、神社と遊廓だった¹⁹。また、橋谷²⁰が指摘したように、日本の植民地のもう一つの特徴は「遊廓」には日本人「娼婦」が多数存在していたということである。欧米植民地にも売春女性はいたが、支配側出身の女性が売春女性になる例はすくなかった。その意味で、植民地への日本式性売春の移植は、近代日本の移民現象の特質を示している。言い換えれば、「満洲遊廓」は、「日本帝国」の「遊廓」という社会構造がそのまま植民地都市空間にも深く浸透した証しである。つまり、「満洲遊廓」とは「日本帝国」の植民地主義のシンボルでもあったのだ。水上の「満洲」関連作品に描かれた「満洲遊廓」は、かつて歴史に実在した大連・逢坂町と奉天・柳町である。「満洲」関連作品の最初作である「大連逢坂町」の中に見られる「満洲遊廓」についての細部の描写は以下のようにになっている。

遊廓は島のように、うしろの一角に灯をのこして、空にむけて、レコードの音や、人声をはじかせて遠ざかった。右手に巨大な寺の建物が空あかりの下に黒くうかんでいた気がする。あれは日本の寺院だったのだろうか²¹。（「大連逢坂町」）

引用では、「ぼく」は「満洲」にいるはずなのに「日本の寺院」があるように錯覚する。このように、「満洲遊廓」は列島日本を離れた大陸にありながら、陰画的な空間として、宗主国による支配の影を終始落としている。また、「大連逢坂町」は、当時国をあげての満洲侵略に血道をあげていた日本の、軍人も、商人も、移民隊員も、一どは下船しなければならぬ港町の遊廓だった²²と書いた水上が、植民地都市であった大連に存在した逢坂町という「遊廓」の実名を明確にして、侵略の真実を明言した点からも、「大連逢坂町」という小説を植民地主義の文脈から改めて取り上げる必要がある。

17 水上勉「北市場の女」『告白 わが女心遍歴』河出書房新社、1963年、44頁。

18 水上勉「大連逢坂町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、18頁。

19 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年、82－83頁。

20 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年、82－83頁。

21 水上勉「大連逢坂町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、31頁。

22 水上勉「大連逢坂町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、33頁。

当時、宗主国である日本に支配される植民地であった「満洲」においては、日本独自の性売買システム—公娼制「娼婦」だけではなく、「遊廓」という空間の設置までも支配者側からの文化制度がそのままの形で移植されていたのである。つまり、「満洲」の「遊廓」はあくまでも宗主国に抑圧されたという事実を示す空間の縮図だともいえる。当時、入植側であった日本の「遊廓」が「満洲」に移植されるのにもなって、日本人「娼婦」が移民として「満洲遊廓」へ入っていただけではなく、朝鮮からも「娼婦」が大勢「満洲」に越境して「遊廓」へ入るという結果をもたらすことになった。このような宗主国の支配の構図が植民地においても反復されていることに関する金富子の言葉²³を借りると、「買春宗主国(日本)の男性—売春宗主国(日本) / 植民地(朝鮮)の女性の身体」という構図でまとめられる。これは、「満洲遊廓」の内実は移動式の性売買施設であり、場所は変わってもあくまで支配する男性と搾取される女性という構図は変わらない構造的搾取を端的に示しているが、被支配者側には宗主国の女性だけではなく植民地の女性を加えられていることが最も重要である。つまり、「満洲遊廓」の内部には日本国内の「遊廓」にある「男性—女性」「買春—売春」のみではなく、「宗主国男性—植民地女性」「宗主国男性—宗主国女性」という支配／被支配の関係も潜んでいる。性の支配的構図は水上の「満洲」関連作品に投影されているだろうか。では、それはどのように描かれているだろうか。次節から辿っていきたい。

2.2 「満洲娼婦」の造形——「からゆきさん」の二重の桎梏

近代日本の女性たちと「満洲」の関係を論じた加納実紀代が「宣教師によって先導されたヨーロッパとちがって、近代日本の海外膨張は、女に始まり女に終わったといえる。それがもっとも典型的なかたちで行なわれたのが満州だった。それだけに、彼女たちは、近代日本の矛盾を集約して背負わされてもいる」²⁴と指摘したように、「満洲国」が建てられた後、日本帝国主義の植民地支配・侵略の広がりとともに、自分の体で稼ぐしかない日本の下層社会を生きる女性たちは「公娼」か「私娼」かを問わず日本から「満洲」へと移動していった。本稿では、こうした日本帝国主義の植民地支配の広がりとともに日本から「満洲」へと移動して自分の体で生計を立てるしかない下層社会を生きる女性たちの群体を「満洲娼婦」と呼ぶ。では、そのような「満洲娼婦」たちの実像は水上勉文学においてどのように描かれているだろうか。まず、次に示す二つの引用を見ていきたい。

大連には四十万の日本人が移住していた記録は、もぐり業者の世話による水商売の女たちも移住して風俗営業が繁昌したことを証すのである²⁵。(『瀋陽の半月』)

大連には四十万の日本人が移住していた記録は、もぐり業者の世話による水商売の女たちで風俗営業も繁盛したことを暗示するのである²⁶。(『瀋陽の月』)

以上の「瀋陽の半月」と『瀋陽の月』からの引用はほぼ同じ内容であるが、いずれも当時の「満洲」における水商売ないし性風俗産業の盛況を物語っている。また、水上の記述から「渡満」する日本の下層社会を生きる女性たちと「もぐり業者」即ち斡旋業者との依存関係が見えてくる。「満洲娼婦」という群体が自然発生的に生じたのではなく、「もぐり業者」という女性の体を商品化する男性たちの存在が浮かび

23 金富子・金栄『植民地遊廓——日本の軍隊と朝鮮半島』吉川弘文館、2018年、24頁。

24 加納実紀代「満洲と女たち」『近代日本と植民地5・膨張する帝国の人流』岩波書店、1993年、201頁。

25 水上勉「瀋陽の半月」『新潮』1986年新年号、11頁。

26 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、13頁。

上がってくることは興味深い。

当時、日本から斡旋業者を通して移動し、大連、奉天、新京などの「満洲」の各主要都市に散在していた「満洲娼婦」という群体は、一体どのくらいの人数に及ぶのだろうか。その実際の数、現在まで僅かに残っている公式の記録より少なくないだろう。例えば、「瀋陽警察庁管内妓女検懲成績表」(1935)²⁷によると、当年の瀋陽市内の「娼婦」の公式に把握されている人数は既に1800人に達した。更に、在籍の「公娼」の以外に、「瀋陽の空」において、「いかがわしい安呑屋や、淫売窟、最下級の娼婦たちが客をひく家があった」²⁸と暗示されているように、公式の記録に残っていない「私娼」「酌婦」「芸酌婦」などの名目で性を売る女性の人数は計り知れないだろう。水上の「満洲」関連作品を読みながら、どのように「満洲娼婦」という非公式の群体が形成されることになったのかを考証し、そして公的な記録からは浮かび上がってこない「満洲娼婦」の実態を探りたい。

注目すべきことは、水上の「満洲」関連作品に登場する「満洲娼婦」が最初の和歌山出身の設定から九州の飯塚出身に統一されているという設定への変化である。しかも、1960年代の作品群における「娼婦」像には、こうした特定の出身地を与えられた人物はいなかった。ここには水上の意図的な設定の変化があるように思われる。特に注意すべきことは、『瀋陽の月』に登場する「娼婦」はつ枝の生まれが単に九州という地名で示されるのみではなく、むしろ「父親は鉱夫だった」²⁹と炭鉱についても詳しく述べられていることである。更に、「時代は戦争昂揚期に入っていたから、石炭生産も景気がいいはずなのに、政府の方針一つで、波のあるのは当時だけにかぎらない。飯塚や田川あたりで水商売を転々していたらしいが、口入屋の世話で、集団渡満してきた」³⁰と、はつ枝などの日本人「娼婦」の過去と、斡旋業者を通して「渡満」した経緯までが細かく語られている。このように、水上勉文学に登場する九州の飯塚という炭坑町出身の日本人「娼婦」たちは、「からゆきさん」と呼ばれる群体に繋がると推測できる。

1976年、森崎和江が「からゆきさん」そのものをタイトルにするノンフィクション作品を出版した。森崎は50年代から炭鉱町でサークル運動をしており、炭坑労働に関する著作を多く持っていた。「からゆきさん」は九州で使われていた言葉で、主に明治、大正、昭和時代、日本から海外へと移動して、売春を主な収入源としていた日本人女性を指す。「からゆきさん」の多くは、農村、漁村などの貧しい家の娘たちであった。彼女たちを海外の娼館へと橋渡ししたのは斡旋業者、女衞たちである。実際には、昭和時代、よく知られていた東南アジア、ロシアの以外に、「満洲」も「からゆきさん」たちの渡航先であった。その背景の一因は交通の便利さである。北九州に位置する福岡港・門司港は当時、日本大陸と「満洲」の玄関口であった大連を行き来する際の要港であった。この港から九州北部出身の「からゆきさん」が「渡満」することは容易であった。鈴木貞美は『満洲国—交錯するナショナリズム』においても、「満洲」における「からゆきさん」に少し言及している³¹。

現在、「からゆきさん」の実態はかなり明らかになってきている。しかし、第二次世界大戦直後、彼女たちの存在は一般に知られないままになっていた。1970年代、水上と同じく福井ゆかりの女性史研究家山崎朋子を筆頭に「からゆきさん」の実態調査が始まる。研究者たちが、関係者への聞き取り調査と当時の新聞記事などの資料調査をもとにして著した幾つかの作品をきっかけに、「からゆきさん」と呼ば

27 瀋陽警察庁衛生科編『瀋陽警察衛生年鑑・康徳2年』1936-1937年、62頁。

28 水上勉『瀋陽の空』『北京の柿』潮出版社、1981年、64頁。

29 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、144-145頁。

30 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、145頁。

31 「女の稼」は、水商売、特に売春を指していわれた。一九世紀後半、島原・天草でいう「からゆきさん」(娘子軍とも)は、多く南方への出稼ぎを指し、(中略)だが、北方へもかなりの数がでていた」(鈴木貞美『満洲国—交錯するナショナリズム』平凡社、2021年、173頁)。

れる海外売春婦群体が世間に注目されるようになった。1972年、山崎朋子のノンフィクション作品『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』が出版された。1974年、この作品を映画化した『サンダカン八番娼館 望郷』が公開された。この映画で北川サキを演じた田中絹代は、第25回ベルリン国際映画祭銀熊賞を受賞した。

「からゆきさん」が世間で注目を集める1970年代が、ちょうど水上が「満洲」関連作品を多く出版した時期と重なることは見逃してはいけない。1979年の「大連逢阪町」以降の「満洲」関連作品に登場する「娼婦」はすべて九州出身という設定に統一されていることは前文に述べたが、この設定の変化には、1970年代以降の山崎朋子らによって「からゆきさん」という群体が歴史のなかに葬られることなく世間から注目されるようになったことが契機となっていると推察される。つまり、山崎朋子らが浮かび上がらせた「からゆきさん」という群体から影響を受けて、水上は「大連逢阪町」から80年代の「満洲」関連作品において素材として取り入れた可能性が高いと推測できる。

『サンダカン八番娼館』においてサキは、「渡満」したのは幼友達であるヤスヨさんに「こげなところで真っ黒なって百姓してとなんて、あんたは馬鹿な。うちと一緒に、満州へきたんか—」「満州は、南洋と違って寒かばって、内地の人間がどしどし渡って行っって、満人や支那人ば働かして、去年より今年、今年より来年と開けていく土地じゃけん、気楽じゃし、お娼売で無うしても銭がころころ儲かると言うもんな」³²と誘われたからである。サキと同じく、水上の「大連逢阪町」におけるヒナ子も「あんた知ってる、九州の飯塚ってとこ。炭坑町よ。フデミさんとね、同じ町内だったし、一しょにきたんだけどね……あの人、奉天の方が稼ぎがよかって、すすめるひとがいたんで……やっぱ、そのひと九州のひとだったけどね……」³³という理由で「渡満」したのである。このように、水上の「満洲」関連作品において九州の炭鉱出身という設定が与えられた越境する出稼ぎ日本人「娼婦」たちは「からゆきさん」のバリエーションの一つといえるのだ。

そもそも、出稼ぎは「からゆきさんたち」の一キーワードで、主体性を帯びているように聞こえるが、越境する出稼ぎ売春婦である「からゆきさん」の像には、前節で確認したように場所は変わっても、あくまで支配する男性と搾取される女性という性の支配的構図が色濃く投射されているといえる。『サンダカン』の副題に「底辺女性史序章」とあるように、彼女たちは日本国内においても、底辺にある貧困な群体であった。また、山崎が「かつて天草や島原の村々から売られて行った海外売春婦たちが、階級と性という二重の桎梏のもとに長く虐げられてきた日本女性の苦しみ of 集中的な表現である」³⁴と指摘したように、彼女たちは詐欺によって、あるいは家父長制の抑圧の下で苦しい境遇に陥ったため、「身売り」をせざるをえなかったのである。つまり、「からゆきさん」とは「階級と性という二重の桎梏」によって生じた群体なのである。

橋谷も『帝国日本と植民地都市』において、「九州から東南アジアや中国へ渡っていった「からゆきさん」の例をあげるまでもなく、日本女性が明治初期から海外に売春婦として流出していたことはよく知られている。植民地都市もその例外ではなかった」³⁵と述べている。水上勉文学の「満洲娼婦」に注目する本稿において重視しなければいけないのは、「渡満」した「からゆきさん」たちは植民地支配を含めた多重桎梏に束縛されていたことである。当時の日本社会では生きにくい問題を抱えていた彼女たちは家庭の犠牲者であった。植民地を生きる場とする「からゆきさん」たちは性的な対象として、日本国家の

32 山崎朋子『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』筑摩書房、1975年、134頁。下線引用者。

33 水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、22頁。下線引用者。

34 山崎朋子『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』筑摩書房、1975年、8頁。

35 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年、94頁。

採った侵略政策の犠牲者でもあった。更に、引き揚げた後の彼女たちの境遇は想像に難くない。多数の日本人「娼婦」は再び「棄民」された。一方、以下の引用のように、「満洲」関連作品に描かれた日本人「娼婦」たちは例外なく現実を冷静に認識しており、異国で家族や国を理想化することを断念している。

思うようにゆかないいらだたしさを噛みしめ、内地へ帰りたい心を封じこめた貧しい女の、必死な喘ぎがその顔に充満していた。宮本さきのあばら骨の出た胸には、炭坑町からもってきたわずかなぬくもりのこっていた³⁶。

(「大連逢阪町」)

「飯塚へは帰らないの」

私はもう一ど寄っていった。

「誰もいないもん。会いたい人がいるんなら、帰ってもいいけどさ、そんな人はいないもん」³⁷

(「瀋陽の空」)

以上の引用にも示唆されたように、「渡満」した日本人「娼婦」たちの中には、自らの意志で「渡満」した人が少なくないが、彼女たちは故郷と国を捨てる覚悟をしたのである。水上の60年代の作品群における「娼婦」は家族観念が強く、家族のために自らを犠牲にするだけでなく、家族との連帯感を保っている傾向がある。例えば、『越前竹人形』の玉枝が臨終の際に残した遺言には喜助への憎みは少しも記されておらず、人の世での生活を名残惜しんでいることがうかがえる。それに対して、「渡満」して「娼婦」となった日本人女性たちは植民地都市である「満洲」において、宗主国である日本の「娼婦」でありながらも、同胞に身売りをして僅かな稼ぎを得るだけで、『満洲国国歌』³⁸にある「新天地」「新満洲」などの宣伝に釣り込まれ、下層階級からは依然として逃れられない。更に、より残酷な史実としては、引き揚げ時、彼女たちの大多数が国境地帯に放置され、「残留婦人」となったり、「慰安婦」となったりした。また、加納実紀代が、「からゆきさん」、「大陸の花嫁」、「大陸の母」という満州に関わりをもった女たちをみると、近代日本の女性差別と、それにもとづく女性利用が見える。売買春を公認していた近代日本では、女たちは「良妻賢母」と「娼婦」に分断され、男の性的快楽の手段か、子産みの道具、さもなければ男を慰撫する「母性」的存在とされてきた³⁹と指摘したように、たとえ遠い国へ行っただとしても、彼女たちを取り巻く抑圧の構図や制度的な搾取である「公娼制度」、そしていわゆる女性を身体的な道具としての価値しか認められない状況は、第1節で確認したように1960年代の水上勉文学でも主題になっていることであるが、明治初期から戦時下においても変わっていない。

ここまで見てきたように、水上の「満洲」関連作品において造形された「満洲娼婦」の像は、自分の身を売ることを余儀なくされる家庭環境という階級的貧困、近代以降の女性の性の支配的構図、つまり「階級と性という二重の桎梏」によって虐げられている群体であり、そうした彼女たちの辛苦を反映しているのである。

2.3 「満洲」の朝鮮人「娼婦」——三重の桎梏

水上勉の「満洲」関連作品のなかで最も成熟した小説である『瀋陽の月』は、水上が「満洲娼婦」への視線や思考を最も全面的に反映できた作品だと言える。引き続き『瀋陽の月』を中心に、植民地都市である

36 水上勉「大連逢阪町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、33頁。下線引用者。

37 水上勉「瀋陽の空」『北京の柿』潮出版社、1981年、75頁。下線引用者。

38 『満洲国国歌』：一部の中国語歌詞：天地内有了新満洲、新満洲有了新天地、頂天立地无苦无忧、造成我国家。

39 加納実紀代「満洲と女たち」『近代日本と植民地5・膨張する帝国の人流』岩波書店、1993年、219頁。

「満洲」における「娼婦」像について考察するが、本節のねらいは「娼婦」間に存在するヒエラルキーを明らかにすることである。

『瀋陽の月』において、「赴任地の都合でたった五日しかいなかった大連滞在中に、当時、日本人のあいだでも、三流と言われていたはずの売淫街逢坂町に登楼したことなど自慢にもならぬが」⁴⁰という一文において明確に示唆されているように、大連に幾つかある「満洲遊廓」や「私娼窟」などの色町においても、一流や三流といった階級の差が存在している。つまり、植民地にされた「満洲」における「遊廓」は、宗主国に投射された陰画的な空間として、日本大陸における「格差」が「満洲遊廓」の内部にそのまま移植された場だといえる。実際に『瀋陽の月』で示されている「三流」とされる「売淫街阪町」には、多くの朝鮮人「娼婦」が集まっている。同じく「娼婦」であっても、朝鮮人「娼婦」の地位は日本人「娼婦」より低く、ほとんど公式な記録に残ることはない「私娼」である場合が多かった。

前掲の【表2】で整理したように、「瀋陽の半月」と『瀋陽の月』において、それまでの水上の「満洲」関連作品には見られなかった朝鮮人「娼婦」がはじめて登場した。また、両作の原文を比較すると、『瀋陽の月』において朝鮮人「娼婦」についての描写が大幅に加筆されたことが確認できる。

次に、『瀋陽の月』における朝鮮人「娼婦」の描写を二つ引用する。

帰りしなに、妓は洗滌をすませてきたままの下着もつけぬシュミーズきりの腰をひねって、ふとんの上から鏡台へ手をのぼし、ひき出しから輪ゴムでしばった名刺の束をとりだしてみせた。輪ゴムをはずしながら、「日本人たくさん来て、わたしを抱いてゆくよ」といった。ぼくは、ゆくよという妓のひびきに、よく売れることのよろこびを語っているふうではあるけれども、淋しさがただよものに気をとられた⁴¹。

平壤出身の妓には、一夜きりの外国人のはずだが、名刺を置いてゆくからには、やさしい契りがあったにちがいがなかった⁴²。

実はこれら二つの引用にある、「娼婦」が一度きりの客の名刺を集めているという設定は、「大連逢坂町」に既に書かれたものの変形形なのである。ただ、「大連逢坂町」においてそれは、日本人「娼婦」宮本さきが行っていたという違いがある。

さきは、腹這いになって、片手を鏡台にのぼし、ひきだしをあけると、手さぐりで紙の束をつかんでだした。見ると、ゴムバンドでとじられた百枚近い名刺の束だった⁴³。（「大連逢坂町」）

以上、『瀋陽の月』と「大連逢坂町」の「娼婦」の描き方を比較すると、こうしたプロットの設定と人物をすり替えるということが語りの手法として重要であると同時に、水上の「満洲娼婦」語りにおける推移、構築の過程を傍証できる一例になるだろう。名刺を収集することは一見無意義な行為に過ぎないが、それは暗喩的な意味を持っているのではないか。

40 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、15頁。

41 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、24頁。

42 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、24-25頁。

43 水上勉「大連逢坂町」『虎丘雲巖寺』作品社、1979年、24頁。

遠い大連にきて、朝鮮人女性の働く部屋で、輪ゴムに括られた数多い日本人の名刺に、ぼくが大人びた感懐をもって不思議はない。どこにゆきずりの客の名刺をていねいに保存していた妓がいたろうか。しかも、その名刺を、他意なげに、さしだしてみせた妓がいたろうか。日本の字がよめぬということから、名刺への思いもちがうところがかりにあったとしてもだ。妓にとって、客は異国の人で、先を急いで去った人である⁴⁴。

以上の引用で語られているように、日本人「娼婦」が商売の手段として名刺を集める可能性はあるが、日本語も読めない朝鮮人「娼婦」が名刺を収集して他人に見せる行為は日本人男性の客を喜ばせることに価値があるからである。これも、植民地である朝鮮が宗主国である日本に長く抑圧されていた歴史と呼応している。また、『瀋陽の月』には、それ以前の叙事的な「満洲」関連作品より、強い抒情性が賦与されていることも見逃せない。特に「ぼく」の朝鮮人「娼婦」との出会い、交際について濃密な描写がある。例えば、作品において、「ぼく」が朝鮮人「娼婦」に「鴨緑江節」⁴⁵を歌うシーンがある。

「朝鮮とシナと境のあの鴨緑江、ながす筏はよけれども、雪や氷にとざされてヨォーあすはまた新義州につきかねる、アア、チョイ、チョイ」とうろおぼえを自信なげにまねてみせた。妓は首すじの静脈をうごかして、大きくわらった。小さびしい顔だちだと思った⁴⁶。

この「鴨緑江節」は大正時代から日本全国的な流行になり、戦前の日本人にとって朝鮮の「鴨緑江」という河の名前は馴染み深い固有名詞となった。湯朝竹山人の『小唄夜話』⁴⁷によると、当時、「鴨緑江節」は朝鮮各地に流行して、花柳界はいうまでもなく、紳士、官吏から商人、小僧までの幅広い人に唄われていた。小野塚久平の『満鮮旅行日記』⁴⁸においても、平壤で朝鮮「妓生」が日本語で「鴨緑江節」を唄う場面の記述がある。また、地理的な面から言うと、「満洲」から日本に帰還する人々の大半は鴨緑江を渡って故郷に戻るため、鴨緑江は朝鮮出身の「娼婦」だけではなく、「ぼく」のような「満洲」に出稼ぎに来た日本人にとっても、「帰郷的」なメタファーとしての意味がある。

異郷者同士である「ぼく」と朝鮮人「娼婦」は望郷の思いを唄に託し、「故郷の喪失」の心境を言い表し、各自の内面にある「満洲国」に抗する「望郷意識」「王道楽土」という夢の虚しさ、儂い幻想に過ぎなかった「満洲」の実態を唄にのせて表出したのである。また、「ぼく」と朝鮮人「娼婦」は異郷者に滞在する者同士だけではなく敵対国の人間同士でもあるが、二人が不思議な親近感を持ったことが次の引用部からもうかがえる。

ぼくは、その夜、彼女の部屋で、二時間ばかりいて言葉もあまり通じないままに何やかや平壤のことや、若狭のことなど話しあってすごし、夜もふけていたと思ったが、馬車で帰った⁴⁹。

上の引用のように、植民地である朝鮮の平壤出身の「娼婦」と宗主国である日本の若狭出身の「ぼく」

44 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、25頁。

45 俗謡の一つであり、鴨緑江に出かせぎに行った筏師に唄われて日本各地に伝わり、大正時代、流行歌として親しまれた。

46 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、23頁。

47 湯朝竹山人『小唄夜話』新書社、1924年、79頁。

48 小野塚久平『満鮮旅行日記』1930年、29頁。

49 水上勉『瀋陽の月』新潮社、1986年、30頁。

は、「満洲」の「遊廓」という周辺的な空間のなかで、お互いの境遇を語り合うことができる。「ぼく」にとっての朝鮮人「娼婦」とは、必ずしもヒエラルキーの最下層に置かれ、搾取されるだけの存在ではなく、むしろ「ぼく」も朝鮮人「娼婦」も「故郷」を喪失しているという意味で中心性を欠いており、周辺的な空間のなかで生きる者同士の連帯感を抱く存在である。

朝鮮は日本に支配された植民地であり、「満洲」に隣接した辺縁的な空間でもある。当時、朝鮮とりわけその北部は、日本大陸から「満洲」への中継地点としての役割を担った場所である。藤永壮⁵⁰によると、早くも1920年代の半ばまでには、植民地朝鮮から「満洲」への女性売買のルートが既に確立されていた。しかし、かつての「満洲」で生きた朝鮮人「娼婦」の女性像を現在知ることはできない。水上は朝鮮人「娼婦」という歴史的な記録にその実態が残りえない人物像を加筆することによって、この「満洲」の「遊廓」の輪郭により周辺的な様相を与えた。こういう点で『瀋陽の月』は、水上の「満洲」関連作品のなかでも、最も成熟した作品だと言えるのだ。前節で、水上の「満洲」関連作品において造形された「満洲娼婦」の像は、「階級と性という二重の桎梏」によって虐げられている日本人の「満洲娼婦」たちの辛苦が反映していると述べたが、『瀋陽の月』の朝鮮人の「満洲娼婦」の造形においては、さらに階級と性という近代的な女性の性を搾取する構造に加えて、植民地主義という国家間のヒエラルキーも加えられている点で、「階級／性／民族という三重の桎梏」によって虐げられる朝鮮人「娼婦」の像を浮かび上がらせているのだ。

おわりに——「満洲娼婦」を語ること

本稿では、水上の1970年代から1980年代の「満洲」関連作品で浮かび上がってくる「満洲娼婦」像は、日本帝国主義の植民地支配の広がりとともに日本から「満洲」へと移動して自分の体で生計を立てるしかない下層社会を生きる女性たちの群体であり、そのような「満洲娼婦」たちの実像は公的な記録に残ることは難しい存在であるが、水上勉文学の「満洲」関連作品とは自分の体を売るしかない女性たちの実態を復元することができる小説シリーズであることが見えてきた。

本稿の第1節では1960年代の水上勉文学に描かれた「娼婦」像を整理し、「母恋い」の反映ではない下層社会を生きる「女性」たちを取り巻く社会構造やコンテクストを分析した。彼女たちを取り巻く抑圧構図や制度的な搾取である「公娼制度」、そして女性が身体的な道具としての性的搾取される構図は、戦時下になってより強化される。第2節でみてきたように、「渡満」した「からゆきさん」の変身である日本人「娼婦」であっても、「慰安婦」の前身である朝鮮人「娼婦」であっても、本質は戦争の「性的な慰安」を担っている。

1970年代以降の水上の「満洲」関連作品において造形された「満洲娼婦」の像は、自分の身を売ることを余儀なくされる家庭環境という階級的貧困、近代以降の女性の性の被支配的構図——つまり「階級と性という二重の桎梏」——に挟まれている群体であり、そうした彼女たちの辛苦が反映しているのである。特に、『瀋陽の月』の朝鮮人の「満洲娼婦」の造形においては、さらに階級と性という女性の性を搾取する近代的構造に加えて、植民地主義という国家間のヒエラルキーも加えられ、「三重の桎梏——階級／性／民族——」を反映した朝鮮人「娼婦」の像を浮かび上がらせている。したがって、『瀋陽の月』は、水上の「満洲語り」の試行錯誤を重ねた成果であり、自らの「満洲実体験」に対する総決算的な作品でもある。作中にて、水上自身の創作意識が工夫によって虚構化された「満洲娼婦」は、水上が「満洲」の本質を問う結晶である。

50 藤永壮「日露戦争と日本による「満州」への公娼制度移植」『快楽と規制：近代における娯楽の行方』、大阪産業大学産業研究所、1998年。

しかし、手放して『瀋陽の月』を評価してはいけない。『瀋陽の月』では「娼婦」はつ枝が「ぼく」の母役として抒情的に造形された。また、「ぼく」は日本人であれ、朝鮮人であれ、「娼婦」に共感する一方、彼女たちの身体を買う支配する側の男性でもあるため、そうした男性という支配者側からの視線を脱することはない。ここには、女性「娼婦」の語り手の不在という大きな問題がある。この、女性の「満洲娼婦」の立場からの語りがないことについては、加納実紀代が「女が、一人の人格をもった存在、さまざまな欲求と可能性をもった主体とはみられず、男の都合にあわせて切りとられ、利用された」⁵¹と表現していることを借りれば、水上の「満洲」関連作品の語り手である男性が「満洲娼婦」を「一人の人格をもった存在」として認識せずに「男の都合にあわせて切りとられ、利用している」という批判を加えることもできるだろう。そうした男性の語りの限界性については、山崎朋子『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』あるいは、森崎和江『からゆきさん』における女性を主体とした語りとの比較を通して検討することを今後の課題としたい。

楊 柳岸(よう りゅうがん) YANG, Luan
東京外国語大学博士後期課程

参考文献

- 水上勉、1963、『告白 わが女心遍歴』河出書房新社。
 水上勉、1979、『虎丘雲巖寺』、作品社。
 水上勉、1981、『北京の柿』潮出版社。
 水上勉、1986、「瀋陽の半月」、「新潮」83（1）。
 水上勉、1986、『瀋陽の月』、新潮社。
 水上勉、1996、『五番町夕霧楼』角川文庫。
 水上勉、2005、『雁の寺・越前竹人形』新潮文庫。
 森崎和江、1976、『からゆきさん』朝日新聞社。
 山崎朋子、1976、『サンダカン八番娼館—底辺女性史序章』筑摩書房。
 大江志乃夫・浅田喬二・三谷太一郎・後藤乾一・小林英夫・高崎宗司・若林正文・川村湊編、1993、『近代日本と植民地5・膨張する帝国の人流』岩波書店。
 廣末保、1997、『悪場所の発想』影書房。
 藤目ゆき、1998、『性の歴史学—公娼制度・墮胎罪体制から売春防止法・優生保護法体制へ』不二出版。
 倉橋正直、2000、『北のからゆきさん』共栄書房。
 橋谷弘、2004、『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館。
 金富子・金栄、2018、『植民地遊廓—日本の軍隊と朝鮮半島』吉川弘文館。
 鈴木貞美、2021、『満洲国—交錯するナショナリズム』平凡社。

51 加納実紀代「満洲と女たち」『近代日本と植民地5・膨張する帝国の人流』岩波書店、1993年、219頁。

